マドヴァ派における議論の勝敗規則

——*Pramāṇapaddhati* におけるニヤーヤ議論学説の受容と批判——

須　藤　龍　真

1. 序

インド議論学の歴史において、仏教及びニヤーヤ学派の学問体系の中で議論学の伝統が連綿と受け継がれ、発展的な議論が展開されたことはよく知られている。議論学の領域において主題とされる内容は多岐にわたるが、とりわけ議論における勝敗規則である敗北の根拠（nigrahasthāna）はニヤーヤ学派の議論学説の核であり、その理論は仏教徒ダルマキールティによる痛烈な批判を背景として、ニヤーヤ学派のウダヤナに至って一種の完成を迎えることとなる。仏教やニヤーヤ学派のみならず、インドの諸哲学派にとって哲学的議論は真実を追求するための基盤となるものである。興味深いことに、独自の議論学の伝統を保有していたと思われるジャイナ教やヴェーダーンタ学派においても、後代においてはウダヤナの議論学説が取り入れられ、批判的に発展せしめられている。それゆえ、彼らによるニヤーヤ議論学説の受容と批判の内容を明らかにすることにより、仏教の影響力が低下した時代におけるインド議論学史を構築することが可能となる。

本稿では、比較的まとまった議論学に関する理論がみられるヴェーダーンタ学派二元論（Dvaita）のマドヴァ派における議論学説を検討する。須藤 [2021b] において示したように、同派の祖とされるマドヴァは議論に関する簡潔な定義集である *Kathālakṣaṇa* を著しており、同書に対しては多くの注釈が施されるなど、彼らの議論学に関する関心の高さが伺われる。とりわけ、マドヴァの著作に対して多くの注釈書を著したジャヤティールタは、自身の独立の著作である *Pramāṇapaddhati* においてマドヴァの議論学説をより体系化させている。それと同時に、同書には敗北の根拠に関する詳細なニヤーヤ議論学説批判が展開されている。同書の内容は Solomon [1976:260–261] に整理されているが、その内容の詳細な分析や彼の思想の背景にまで迫ったものとはいえない[1]。それゆえ、本稿ではマドヴァ及びジャヤティールタの議論学説の概要を敗北の根拠に関する記述を中心に確認した上で、ジャヤティールタのニヤーヤ議論学説批判の内容を分析する。その際、彼の批判対象であるニヤーヤ学説をニヤーヤ学派の文献中に辿り、その対応関係を示す。以上の作業により、

* 本研究は JSPS 科研費 JP 20J00332 の助成を受けたものである。また、本稿の審査過程において、二名の匿名の査読者より適切かつ有益な助言をいただいた。ここに深謝する。

[1] ジャヤティールタの著作のうち、*Pramāṇapaddhati* の英訳として入手しやすいものには Varakhedi [2011] があり、簡潔な解説が付されている。また、Nāgarāja Rao [1976] を参照。さらに、議論学に関するより詳細な議論がみられる *Pramāṇalakṣaṇaṭīkā*（or *Nyāyakalpalatā*）には Joshi [1987] の英訳及び思想研究がある。ただし、本稿の主たる考察箇所である議論学に関する箇所のうち、提題の破棄（pratijñāhāni）から定説を離れたもの（apasiddhānta）の解説箇所（Cf. Joshi [1987:172–173]）、及び詭弁的論駁の解説箇所（Cf. Joshi [1987:212]）については、冗長となること（unnecessary length）を避けるため省略されている。

マドヴァ派の議論学説の基本的な枠組みを整理し、インド議論学史におけるその独自性、及びニヤーヤ学派とヴェーダーンタ学派マドヴァ派との影響関係を明らかにすることが本稿の目的である。

2. マドヴァ派における六種の敗北の根拠

2.1. マドヴァの敗北の根拠の枠組み

マドヴァ（Madhva あるいは Ānandatīrtha, ca. 13c[2]）は正しい認識の手段に関する綱要書的小品である *Pramāṇalakṣaṇa* において自身の認識論・論理学・議論学の体系を整理して示している。彼によれば、正しい認識の手段とは知覚（pratyakṣa）、推論（anumāna）、アーガマ（āgama）の三種であり、他学派において認められる類推（upamā）などの別の正しい認識の手段は上記三種のいずれかに含まれる。本稿の考察対象である議論における勝敗規則に関しては、推論との関連で以下のように言及される。

> 論理的導出の過失（upapattidoṣa）とは(A)矛盾（virodha）と(B)不適当（asaṅgati）である。(C)不足(nyūna）と(D)余分(adhika)は表現上の過失である。(E)同意(saṃvāda)と(F)非言及（anukti）と一緒になった［(A)～(F)の六種］が敗北である[3]。

マドヴァが議論における敗北の根拠[4]として(A)矛盾、(B)不適当、(C)不足、(D)余分、(E)同意、(F)非言及という六種のみを認めていることが分かる。さらに、彼は *Brahmasūtra* に対して *Brahmasūtrabhāṣya* という注釈を施した上で、さらに *Anuvyākhyāna* という著作を著しているが、そこでも同様の言及が為されている。

> また、(A)矛盾と(B)不適当は直接的な道理の過失である。実に、提題［内容］に関係ないものが道理に関して(B)不適当と言われる。
> また、(A)矛盾は三種のみである。［すなわち、］提題内容が矛盾していること、証相の欠如、不遍充である。一方、(C)不足と(D)余分は表現上の［道理の過失］である[5]。

---

[2] Cf. Sharma [1981:79–82].

[3] PL, p. 2: upapattidoṣau virodhāsaṅgatī. nyūnādhike vācanike. saṃvādānuktiyutā nigrahāḥ.

[4] マドヴァはこの六種を *Pramāṇalakṣaṇa*, *Kathālakṣaṇa*, *Anuvyākhyāna* いずれにおいても「敗北」(nigraha）と呼ぶが、ジャヤティールタは「敗北する＝打ち負かされる手段／根拠、というのが「敗北」(nigraha）すなわち敗北の根拠（nigrahasthāna）である」(NSudhā, p. 814）と注釈し、ニヤーヤ学派などの他学派における用語との会通を図っている。この点を考慮し、本稿では、マドヴァが用いる nigraha の語に対しても断りなく「敗北の根拠」と表現した。なお、ニヤーヤ学派における敗北の根拠の概要については須藤・片岡 [2021] を参照。

[5] AV 2.1.35–36, pp. 797–803:
virodho ’saṅgatiś caiva sākṣād yuktes tu dūṣaṇam /
pratijñāyām asaṃbandho yukter uktā hy asaṅgatiḥ //
virodho ’pi tridhaiva syāt pratijñārthaviruddhatā /
liṅgarāhityam avyāptir nyūnādhikye tu vācike //

また、(E)同意と(F)非言及と一緒になった以上の［(A)～(F)の六種］のみが敗北である[6]。

両書の説明によれば、以上の六種はその性格から、論理的導出 / 道理の直接的な過失（A、B）、論理的導出 / 道理の表現上の過失（C、D）、その他の敗北（E、F）という三通りに分類される（表 1）。

表 1　マドヴァによる六種の敗北

論理的導出 / 道理の直接的な過失	（A）矛盾、（B）不適当
論理的導出 / 道理の表現上の過失	（C）不足、（D）余分
（その他の敗北）	（E）同意、（F）非言及

ここで、論理的導出（upapatti）あるいは道理（yukti）の過失が敗北として述べられているのは、彼が推論を「過失のない論理的導出」（nirdoṣopapatti）、「道理」（yukti）と定義していることに由来する[7]。それゆえ、マドヴァが議論における勝敗の根拠として、推論における過失の有無を重視していることが理解されよう[8]。

また、*Anuvyākhyāna* では(A)矛盾に、〈提題内容が矛盾していること〉〈証相の欠如〉〈不遍充〉という三つの下位区分が示されていたが、*Pramāṇalakṣaṇa* では以下のような分類も言及される[9]。

なお、続く *Anuvyākhyāna* 2.1.37–38ab では「論証手段が論証対象の能遍に逆らうこと」（*sādhanasya sādhyavyāpakavailomya）が不遍充として、また、「劣った力をもつものとの矛盾」（durbalena virodha）と「自身の文章との矛盾」（svavākyena virodha）とが非立証手段として付随的に言及される。このうち、「論証手段が論証対象の能遍に逆らうこと」は *Anuvyākhyāna* における(A)矛盾の下位区分である不遍充に分類されているが、後二者の分類はここからは明らかにされない。一方、「自身の文章との矛盾」は後述する *Pramāṇalakṣaṇa* において(A)矛盾の下位区分として言及される。ただし、これらの誤謬の類型の（A）矛盾の分類がマドヴァによって十分に体系化されているとは言い難い。

[6] AV 2.1.38cd, p. 814:

saṃvādānuktisaṃyuktā eta eva ca nigrahāḥ //

[7] PL, p. 1: nirdoṣopapattir anumānam.「推論とは過失を欠いた論理的導出である」; AV 2.1.31a, p. 782: anumā yuktir evoktā.「推論とは他ならぬ道理と言われる。」ジャヤティールタはマドヴァが nirdoṣopapatti と yukti という異なる語を用いて推論を定義していることに関して *Nyāyasudhā* において説明している。彼によれば、両者が同義語であるとすれば、道理は一義的に過失を欠いていることが含意されているため、nirdoṣa という語が適用されない（NSudhā, p. 783）。あるいは、両者が同義語ではないとすれば、後者は「必ず［論証対象のみと］結び付くもの」（yuktir eva）という点で「一方に定まらないもの」（anaikāntika）という疑似的理由を排除する機能を有し、必然的関係をもつことを意味する（NSudhā, p. 783）。続く箇所では、主題所属性が推論の必須要素ではなく、遍充関係（vyāpti）が重要視される点が説示されるが、このようなマドヴァ派の論理学の枠組みについては、ジャヤティールタなどによる他学派批判の文脈を再検討した上で稿を改めて論じたい。なお、upapatti という語は「当てはまること」「妥当（性）」などと訳出することも可能であろうが、本稿では、同語が「道理」（yukti）と言い換えられる文脈、及びその機能的側面に焦点をあて「論理的導出」という訳語を用いた。

[8] ただし、*Kathālakṣaṇa* においてはアーガマによって知られる対象に関する議論が中心的な話題とされている（Cf. 須藤 [2021b]）。

[9] 矛盾（virodha）を複合語の後半部とする諸語の訳については一部須藤 [2021b:79] から変更した。

認識手段あるいは自身の文章との矛盾がある。自身の文章との矛盾は、定説を離れたもの（apasiddhānta）と詭弁的論駁（jāti）を在り方とするものとして存在する[10]。

提題（pratijñā）・理由（hetu）・実例（dṛṣṭānta）の区別によって（A）矛盾は三種である。認識手段と矛盾する内容をもつ提題が提題の矛盾である。理由それ自体の不成立と不遍充というのが理由の矛盾である。論証対象あるいは論証手段に沿わないものが実例の矛盾である[11]。

両書の記述を比較すると、*Anuvyākhyāna* における「提題内容が矛盾していること」は *Pramāṇalakṣaṇa* における「提題の矛盾」（pratijñāvirodha）と内容上一致し、*Anuvyākhyāna* における「証相の欠如」「不遍充」は *Pramāṇalakṣaṇa* における「理由それ自体の不成立」「不遍充」とそれぞれ対応することから「理由の矛盾」（hetuvirodha）と一致することが分かる（表 2、*Anuvyākhyāna* に直接あるいは間接的に言及されるものに下線を引いた）。

表 2　マドヴァによる「矛盾」の下位区分

<table>
<tr><td rowspan="6">（A）矛盾</td><td rowspan="3">提題の矛盾
（＝<u>提題内容が矛盾していること</u>）</td><td colspan="2"><u>認識手段との矛盾</u></td></tr>
<tr><td rowspan="2"><u>自身の文章との矛盾</u></td><td>定説を離れたもの</td></tr>
<tr><td>詭弁的論駁</td></tr>
<tr><td rowspan="2">理由の矛盾</td><td colspan="2">理由それ自体の不成立（＝<u>証相の欠如</u>）</td></tr>
<tr><td colspan="2"><u>不遍充</u></td></tr>
<tr><td>実例の矛盾</td><td colspan="2">論証対象あるいは論証手段に沿わないもの</td></tr>
</table>

ただし、以上の対応関係に従えば、マドヴァは *Anuvyākhyāna* において「提題の矛盾」と「理由の矛盾」のみに言及し、「実例の矛盾」への言及を欠いていることになる。この点については後代、ジャヤティールタが論旨を補いつつ、*Anuvyākhyāna* では〈自身のための推論〉、*Pramāṇalakṣaṇa* では〈他者のための推論〉における過失が意図されていると説明するが[12]、この区別がマドヴァの意図に沿ったものであるかは疑わしい。

---

[10] PL, p. 2: virodho mānasvavākyābhyām. svavākyavirodho ’pasiddhāntajātirūpeṇa.

[11] PL, p. 2: trividho virodhaḥ pratijñāhetudṛṣṭāntabhedena. pramāṇaviruddhārthapratijñā pratijñāvirodhaḥ. hetusvarūpāsiddhivyāptiś ceti hetuvirodhaḥ. sādhyasya sādhanasya vānanugamo dṛṣṭāntavirodhaḥ. なお、続く箇所では「提題の等しい力をもつものとの矛盾」（pratijñāyāḥ samabalavirodhaḥ）＝「わきにあるものの過失」（upādhidoṣa）が「対立論証をもつもの」（sapratisādhana）として言及される。先述の *Anuvyākhyāna* における「劣った力をもつものとの矛盾」の議論を想起させるものではあるが、この誤謬の位置付けについてもここでは不明である。

[12] NSudhā, p. 800: nanu cānyatra trividho virodha ityādinā liṅgarāhityāvyāptyor ekatām upādāya sādhyasya sādhanasya vānanugamo dṛṣṭāntavirodhas tṛtīyatayā parigṛhītaḥ − atrāpi sādhyasādhanavaikalyaṃ dṛṣṭāntasyeti vakṣyati. tat katham etat − na cātrāpi tadadhyāhāreṇa tathaiva vyākhyānaṃ yuktam. dṛṣṭāntadoṣasyānumānadoṣatānupapatteḥ. na hi dṛṣṭānto ’numānam. tathāpy anumānāṅgavyāptidūṣakatayānumānadoṣatvam astu. dṛṣṭāntasya sādhyavaikalye sādhanasya sādhyaparityāgāt. sādhanavaikalye tu vyāpter anupadarśanād iti cet − na. tathā

Pramāṇalakṣaṇa においてマドヴァが「自身の文章との矛盾」の下位区分とする「定説を離れたもの」（apasiddhānta）と「詭弁的論駁」（jāti）の両者は、ともにニヤーヤ学派の議論学説にみられるものである。すなわち、「定説を離れたもの」はニヤーヤ学派の二十二種の敗北の根拠の一種であり、また、「詭弁的論駁」はニヤーヤ学派の十六原理の一つに数え上げられる。ここで用いられる両語がニヤーヤ学派の議論学説を念頭に置いたものであることは、直後に、彼が同じくニヤーヤ学派の十六原理に含まれる「曲解」（chala）を（B）不適当と同一視していることからも明らかであろう[13]。ニヤーヤ学派の議論学説において、論諍（jalpa）などの勝利を望むもの達の議論は、曲解・詭弁的論駁・敗北の根拠の適用という側面から定義付けられる[14]。このうち、曲解と詭弁的論駁は、ウダヤナに至って二十二種の敗北の根拠の一つである「批判すべきでないものへの批判」（niranuyojyānuyoga）の下位区分に位置付けられる[15]。おそらくこのことを考慮して、マドヴァは自身の六種の

---

saty avyāptyaiva saṃgṛhītatvena tṛtīyatvānupapatter ity ucyate. svārthānumāne hi dṛṣṭavyāptikasya liṅgasya vivakṣitasthale siddhimātreṇa sādhyapramitir utpadyata iti tatparipanthināṃ doṣatvam abhipretya pratijñārtha-viruddhatāliṅgarāhityāvyāptīnām atra grahaṇam. parārthānumāne tv[1)] avyāptyaupayikasyāpi dṛṣṭāntadoṣasya tadāśrayatayā pratītatvena tathaivodbhavanīyatājñāpanāya tena saha trividhatvam anyatroktam iti na[2)] virodhaḥ. [1)]-ne tv] em.; -ne(pya)tv Ed. [2)] na] em.; nāṃ Ed.「【反論】別の場所（＝*Pramāṇalakṣaṇa*）では「（A）矛盾は三種である」云々によって〈証相の欠如〉と〈不遍充〉を［〈理由の矛盾〉という］一つのものとして取り上げた上で、論証対象あるいは論証手段に沿わないものである〈実例の矛盾〉が第三のものとして数え上げられた。【応答】ここでも、論証対象あるいは論証手段の欠如が実例にあると後で述べる。それゆえ、これがどうしたのか。【反論】しかし、ここでもそれを補うことで全く同様に説明するのは正しくない。実例の過失が推論の過失となるのはありえないから。なぜなら、実例は推論ではないから。［あるいは］そうであったとしても、［実例の過失が］推論の構成要素である遍充関係を悪しくするものである以上、推論の過失としてもかまわない。実例が論証対象を欠く場合に、論証手段は論証対象を棄却するから。一方、［実例が］論証手段を欠く場合には、遍充関係が示されないから。【応答】そうではない。そうすると、〈不遍充〉のみによって［理由の過失と実例の過失が］まとめられるので［実例の過失が］第三のものであることはありえないと言われる。なぜなら、自身のための推論の場合、遍充関係が見られた証相が意図した主題に単に成立するだけで論証対象の認識が生じるので、それを阻害するものを過失として意図して、〈提題内容の矛盾〉〈証相の欠如〉〈不遍充〉をここで言及しているから。一方、他者のための推論の場合、遍充関係をもつわけではない実例の過失もまた、その［遍充関係］の拠り所として理解されるので、全く同様に指摘されるべきであると知らしめるために、その［実例の矛盾］と一緒になった三種が別の場所（＝*Pramāṇalakṣaṇa*）で述べられた。というわけで、［両書の記述に］矛盾はない。」

[13] PL, p. 2: chalam asaṅgatam. gṛṣṭivivakṣayā “gām ānaya” ity ukte pṛthivīvivakṣayā “gavānayanam aśakyam” itivat.「曲解は不適当なものである。［ある人が］子牛を意図して “gām ānaya”（子牛を意図して述べる人にとっては「牛（go）を連れて来い」が意味内容）と述べる場合に、［別の人が］地を意図して「地（go）を連れてくることはできない」というように。」

[14] Cf. NS 1.2.2, p. 40: yathoktopapannaś chalajātinigrahasthānasādhanopālambho jalpaḥ.「論諍とは、述べられた通りのものをそなえ、曲解・詭弁的論駁・敗北の根拠を用いた論証と論難が為されるところである。」なお、「述べられた通りのものをそなえ」（yathoktopapanna）という語は論議の定義的特質の内容を指すが、その適用範囲については注釈者により見解が異なる。

[15] NP, p. 223: sa caturvidhaḥ, chalaṃ jātir ābhāso ’navasaragrahaṇaṃ ceti.「その［批判すべきでないものへの批判］は、（1）曲解、（2）詭弁的論駁、（3）疑似的な［敗北の根拠］、（4）時宜を得ない［敗北の根拠の］把握／言及（cf. 脚注 65）、という四種である。」

敗北の根拠の枠組みを提示した上で、詭弁的論駁を(A)矛盾に、曲解を(B)不適当に充てがうことで、ニヤーヤ学派の議論学説の枠組みを批判していると推察される[16]。

また、議論学説綱要書である *Kathālakṣaṇa* において、マドヴァはニヤーヤ学派と同様に論議（vāda）・論諍（jalpa）・論詰（vitaṇḍā）という三種の議論形態を承認した上で、独自の六種の敗北の根拠の運用方法に言及している。そこでは、真実の確定を目的とする論議の場合には真実の確定に逆らうこと（tattvanirṇayavailomya）が敗北とされ、(E)同意はむしろ称賛される行為とみなされる。他方で、勝利を目的とする競争的な議論である論諍・論詰の場合には、上述の六種の敗北の根拠が適用される。論議と論諍・論詰との間に敗北の根拠の適用範囲の区別を設ける以上の見解は、ニヤーヤ学派においてもみられる[17]。マドヴァは同書においても、あらゆる敗北の根拠が六種に含まれると指摘しており、他学派の議論学説批判の意図を汲み取ることができるが、具体的な批判は見られない[18]。

以上の通り、マドヴァは競争的な議論において適用される敗北の根拠として（A)矛盾、(B)不適当、(C)不足、(D)余分、(E)同意、(F)非言及という六種を承認し、他学派が認める他の敗北の根拠が六種いずれかに含まれると示していた。彼によってニヤーヤ学派などとは異なる議論学説が提唱されていることは、インド議論学史の展開を示すものとして注目に値する。ただし、(A)矛盾の下位区分や、(B)不適当の定義的説明に関する言及が一部にみられるものの、*Pramāṇalakṣaṇa* などにおける簡潔な言及のみからマドヴァの提唱する個々の敗北の根拠の性格を理解することは難しい。

なお、彼の認識論及び議論学に関する見解が *Brahmatarka* という著作に依拠したものであることが、彼自身によって *Pramāṇalakṣaṇa* 及び *Kathālakṣaṇa* の結部において表明されている[19]。実際、彼は *Viṣṇutattvanirṇaya* において *Brahmatarka* の文言を引用しており、そこには上述の六種の敗北の根拠への言及が見られる[20]。ただし、そこでの言及も簡潔なものに過ぎない。それゆえ、以下では、マドヴァ派を代表する論師の一人であるジャヤティールタの著作に言及される議論学説の検討を通して、マドヴァ派において想定される議論の

---

[16] *Pramāṇalakṣaṇa* における上述の「曲解は不適当なものである」という言及と曲解の具体例との間には、刊本による相違はあるものの「また、別のものがある」（anyac ca）という文言が挿入される。実際、ジャヤティールタはニヤーヤ学派の二十二種の敗北の根拠への批判をここに読み込むために、同語に対して別の角度から四度注釈している（PLṬ, pp. 316–320）。ただし、文脈上、また定義集としての性格上、マドヴァ自身によって anyac ca が四度続けて言及されていたとは想定しづらい。なお、ジャヤティールタは当該箇所において、曲解が(B)不適当のみならず(A)矛盾にも分類されうることを指摘している（Cf. PLṬ, pp. 187–188）。

[17] Cf. Sudo [2021a].

[18] なお、マドヴァ著 *Kathālakṣaṇa* についてはパドマナーバティールタの注釈とともに須藤 [2021b] において和訳を行った。同書における議論学説の概要についてはそちらを参照されたい。なお、六種の敗北の根拠に対する訳語の一部を変更したが、後述するジャヤティールタの文意論に由来する定義や、詩論書における類似概念との関係性などを考慮すれば、これらの訳語については再考の余地があるかもしれない。

[19] Cf. PL, p. 4: brahmatarkoktimārgataḥ.「*Brahmatarka* の叙述方式に基づいて」; KL, p. 3: brahmatarkānusārataḥ.「*Brahmatarka* に沿って。」

[20] Cf. VTN, p. 17: virodhaś ca tathādhikyaṃ nyūnatāsaṅgatis tathā. upapattidoṣā vijñeyā virodhaś ca svato 'nyataḥ. ... nigrahā eta eva syuḥ saṃvādānuktisaṃyutāḥ.「また、(A)矛盾、(D)余分、(C)不足、(B)不適当が論理的導出の過失であると知るべし。また、自他に基づく矛盾がある。……（E)同意と(F)非言及と一緒になっ

勝敗規則の内実を明らかにしたい。

2.2. ジャヤティールタの議論学説

ジャヤティールタ（Jayatīrtha, 1330–1388）はマドヴァの著作の多くに注釈を施しており、上述の三つの著作に対しても詳細な解説を行っている。また、彼は正しい認識の手段に関するマドヴァ派の学説の要諦を示した *Pramāṇapaddhati* という独立の著作を著しており、同書は知覚章、推論章、アーガマ章の三章からなる。そのうち、推論章において、ジャヤティールタは推論を〈過失を欠いた論理的導出〉と定義するマドヴァの見解に従いつつ[21]、論理的導出の過失（upapattidoṣa）を次のように説明している。

> それが存在すると、証相として認められたものが如何なる知も生み出さない、あるいは疑惑・錯誤を作り出す、そのようなものが［論理的導出の］過失である[22]。

その上で、論理的導出の過失の下位区分として、意味の過失（*arthadoṣa）である（A）矛盾、（B）不適当と、発言の過失（*vacanadoṣa）である（C）不足、（D）余分を提示する[23]。この分類は、マドヴァが前者を〈論理的導出の直接的な過失〉、後者を〈論理的導出の表現上の過失〉としたことと共通している。ジャヤティールタは上記の四種の論理的導出の過失に加えて、（E）同意と（F）非言及を話者の過失（vaktṛdoṣa）と位置付け、マドヴァと同じく六種を敗北の根拠とする（表 3）。

た以上のこれらが敗北となろう。」なお、vijñeyā を jñeyā と訂正することにより、全体としてシュローカに近い詩型を見出しうるが、その場合、c 句第 5 音節が長音（do）となるため本稿では採用しなかった。*Brahmatarka* の位置付けについては Joshi [1987:23–25;53–54], Mesquita [2014] [2016] などを参照。特に Mesquita [2014] に見られるように、マドヴァが *Viṣṇutattvanirṇaya* 等で言及する未同定の多くの資料の帰属先に関しては、それをマドヴァ自身（あるいはヴィシュヌ）に帰す見解や、彼に先行する散逸した著作に帰す見解などに基づく多くの議論が為されている。本稿はこの問題には立ち入らない。

[21] PP, p. 10: nirodṣopapattir anumānam.「推論とは過失を欠いた論理的導出である。」

なお、ジャヤティールタは論理的導出（upapatti）の同義語として、道理（yukti）のほか、所遍（vyāpya）や証相（liṅga）を挙げている（Cf. PP, p. 10: upapattir vyāpyaṃ yuktir liṅgam iti paryāyaḥ.）。この意味で、論理的導出は狭義的には論証の構成要素である理由（hetu）概念とも同一視されうるものといえる。続く箇所では、遍充関係（vyāpti）や推論様式に関する自説が提示され、その後、推論の自他の区別、及び他者のための推論（parārthānumāna）における支分の数の議論が展開される。

[22] PP, p. 16: yatsadbhāve liṅgābhimataṃ jñānam eva na janayati saṃśayaviparyayau vā karoti, te doṣāḥ.

[23] PP, pp. 16–17: te dvividhāḥ, arthavacanadoṣabhedāt. tatra sākṣād upapatter eva doṣau virodhāsaṅgatī. taddvārā vacanasyāpi. vacanadoṣau nyūnādhikye. vacanadvāreṇārthasyāpi.「その［論理的導出の過失］は、意味の過失と発言の過失との区別により二種である。そのうち、直接的な論理的導出のみの過失が（A）矛盾と（B）不適当である。それを通して発言にも［過失がある］。発言の過失が（C）不足と（D）余分である。発言を通して意味にも［過失がある］。」; PP, p. 17: na kevalam upapattidoṣāṇāṃ virodhādibhiḥ saṃgrahaḥ. kiṃ nāma. naiyāyikanirūpitāśeṣanigrahasthānānāṃ vaktṛdoṣābhyāṃ saṃvādānuktibhyāṃ yuteṣv evāntarbhāvaḥ.「論理的導出の過失である（A）矛盾などだけで［敗北の根拠が］まとめあげられるわけではない。なぜかというと、ニヤーヤ学派のもの達が説明する全ての敗北の根拠は、話者の過失である（E）同意と（F）非言及と一緒になった［（A）矛盾など］にこそ含まれるから。」

表3　ジャヤティールタによる六種の敗北

マドヴァ	ジャヤティールタ	敗北
直接的な過失	意味の過失	（A）矛盾、（B）不適当
表現上の過失	発言の過失	（C）不足、（D）余分
（その他の敗北）	話者の過失	（E）同意、（F）非言及

また、彼は（A）矛盾、（B）不適当、（C）不足、（D）余分について、推論に立脚するもの（anumānaniṣṭha）と協約締結・審問・自身の主張の論証・相手の主張の排斥を本質とする議論の在り方に共通するもの（samayabandhapraśnasvapakṣasādhanaparapakṣanirākaraṇātmakakathārūpasādhāraṇa）という二種をたてる[24]。これにより、推論のみに限定されない種々の意味の過失や発言の過失が扱われうることとなる。なお、ジャヤティールタは（A）矛盾の下位区分として、提題・理由・実例の観点から三種の推論の矛盾（anumānavirodha）を承認しており、マドヴァの *Pramāṇalakṣaṇa* における枠組みを大枠として引き継ぎつつ、より詳細な区分を立てていることが分かる（表4）。

表4　ジャヤティールタによる（A）矛盾の下位区分

<table>
<tr><td rowspan="12">矛盾[25]</td><td rowspan="7">提題の矛盾[26]</td><td rowspan="4">認識手段（＝知覚・推論・アーガマ）との矛盾[27]</td><td rowspan="2">強力な認識手段との矛盾[28]</td><td>多数性によるもの</td></tr>
<tr><td>本質によるもの</td></tr>
<tr><td rowspan="2">等力な認識手段との矛盾[29]</td><td>同じ推論との矛盾</td></tr>
<tr><td>別の推論との矛盾</td></tr>
<tr><td rowspan="4">自身の発言との矛盾[30]</td><td colspan="2">定説を離れたもの[31]</td></tr>
<tr><td rowspan="3">詭弁的論駁[32]</td><td>同一の話者をもつ文における二語あるいは内在する二文の相互撞着</td></tr>
<tr><td>自身の行為との矛盾</td></tr>
<tr><td>自身の論理との矛盾</td></tr>
<tr><td rowspan="5">理由の矛盾[33]</td><td colspan="3">不成立（asiddhi, = liṅgasyāpramitiḥ）[34]</td></tr>
<tr><td rowspan="3">不遍充[35]</td><td colspan="2">（a）証相にある論証対象とその［論証対象］の非存在との関係</td></tr>
<tr><td colspan="2">（b）論証対象との関係が存在せず、かつその［論証対象］の非存在のみとの関係</td></tr>
<tr><td colspan="2">（c）［論証対象と論証対象の非存在との］両方との関係の非存在</td></tr>
<tr><td rowspan="2">実例の矛盾[36]</td><td colspan="3">論証対象の欠如</td></tr>
<tr><td colspan="3">論証手段の欠如</td></tr>
</table>

[24] PP, p. 17: ete ca virodhādayo dvividhāḥ. samayabandhapraśnasvapakṣasādhanaparapakṣanirākaraṇātmakakathārūpasādhāraṇā anumānaniṣṭhāś ca.「また、以上の矛盾などは二種であり、〈協約締結・審問・自身の主張の論証・相手の主張の排斥を本質とする議論の在り方に共通するもの〉と〈推論に立脚するもの〉である。」ここで言及される協約締結（samayabandha）はシュリーハルシャなどの論師によっても議論に先立つものとして重要視される。なお、注釈者のラーガヴェーンドラティールタは具体例として「それぞれの定説に沿って支分などの使用が為されるべし」というものを挙げる（Cf. PP, p. 306）。また、別の注釈者であるサティヤナータは提題に関する論理的導出の過失を前者に、理由と実例に関する論理的導出の過失を後者に分類するが（Cf. PP, p. 307）、ジャヤティールタの理解に沿ったものであるかは現時点では判断できない。

ここでは、マドヴァによってその位置付けが明確化されなかった、力関係をもつ認識手段との矛盾などが体系的に分類されている。このことから、ジャヤティールタはマドヴァが *Pramāṇalakṣaṇa* や *Anuvyākhyāna* などにおいて説示する種々の誤謬を、自身の著作において(A)矛盾のうちに統合しているといえる。以上の構造化は(A)矛盾のみに対して為されるが、ほかの論理的導出の過失である(B)不適当、(C)不足、(D)余分についても同様に提題・理由・実例の三種に区分されると説明される[37]。一方、話者の過失である(E)同意及び(F)非言及には当然ながら以上の論証支分に基づく分類は適用されていない。

---

[25] PP, p. 17: tatrānumānaniṣṭhās tāvad ucyante. trividho 'numānavirodhaḥ pratijñāhetudṛṣṭāntavirodhabhedena.「そのうち、まず、推論に立脚するものが述べられる。推論の矛盾は、提題・理由・実例の矛盾の区別によって三種である。」

[26] PP, p. 17: tatra pramāṇavirodhaḥ svavacanavirodha iti dvividhaḥ pratijñāvirodhaḥ.「そのうち、提題の矛盾は〈認識手段との矛盾〉と〈自身の発言との矛盾〉との二種である。」

[27] PP, p. 17: pramāṇavirodho 'pi dvedhā, prabalapramāṇavirodhaḥ samabalapramāṇavirodhaś ceti. hīnabalasyānenaiva bādhitasyākiṃcitkaratvāt.「〈認識手段との矛盾〉もまた二種であり、〈強力な認識手段との矛盾〉と〈等力な認識手段との矛盾〉である。他ならぬこの［認識手段］によって排撃される弱力なものは何も生み出さないから。」

[28] PP, p. 17: prābalyaṃ ca dvividhaṃ bahutvena svabhāvena ca. ... pratyakṣādivirodhabhedena dvāv api pratyekaṃ trividhau.「また、強力であることは二種あり、多数性によるものと本質によるものとである。……知覚などとの矛盾の区別によっていずれもそれぞれ三種ある。」

[29] PP, p. 17: samabalānumānavirodho 'pi dvedhā, tenaivānumānenānumānāntareṇa ceti.「等力な推論との矛盾も二種あり、同じその推論との［矛盾］と、別の推論との［矛盾］である。」

[30] PP, p. 17: svavacanavirodho 'pi dvividhaḥ, apasiddhānto jātir iti.「〈自身の発言との矛盾〉も二種あり、〈定説を離れたもの〉と〈詭弁的論駁〉とである。」

[31] PP, p. 17: tatra pūrvācāryair yat prāmāṇikatayābhyupagatam, tadviruddhāṅgīkāro 'pasiddhāntaḥ. pūrvācāryavacanasyāpi svayamaṅgīkṛtatvena svavacanatvāt.「そのうち、先師によって正しい認識として承認されたもの、それに矛盾するものの承認が〈定説を離れたもの〉である。先師の発言もまた、自ら承認されたものである点で、「自身の発言」であるから。」

[32] PP, p. 17: svavacana eva vyāhatir jātiḥ. sā trividhā, ekakartṛke vākye padayor avāntaravākyayor vā mitho vyāghātaḥ, svakriyāvirodhaḥ, svanyāyavirodhaś ceti.「他ならぬ自身の発言における撞着が詭弁的論駁である。それは三種あり、〈同一の話者をもつ文における二語あるいは内在する二文の相互撞着〉、〈自身の行為との矛盾〉、〈自身の論理との矛盾〉である。」なお、詭弁的論駁を「自家撞着」(svavyāghāta) と定義するウダヤナの見解については小野 [2017:56–57] を参照。

[33] PP, p. 17: hetuvirodho 'pi dvividhaḥ, asiddhir avyāptiś ceti.「〈理由の矛盾〉も二種あり、〈不成立〉と〈不遍充〉である。」

[34] PP, p. 17: samucitasthale liṅgasyāpramitir asiddhiḥ.「適切な論題における証相の非認識が〈不成立〉である。」

[35] PP, p. 17: avyāptis trividhā, liṅgasya sādhyena tadabhāvena ca saṃbandhaḥ, sādhyasaṃbandhābhāve sati tadabhāvenaiva saṃbandhaḥ, ubhayasaṃbandhābhāvaś ceti.「〈不遍充〉は三種あり、〈証相にある論証対象とその［論証対象］の非存在との関係〉、〈論証対象との関係が存在せず、かつその［論証対象］の非存在のみとの関係〉、〈両方との関係の非存在〉である。」

[36] PP, p. 17: dṛṣṭāntavirodho 'pi dvividhaḥ, sādhyavaikalyaṃ sādhanavaikalyaṃ ceti.「実例の矛盾も二種あり、〈論証対象の欠如〉と〈論証手段の欠如〉である。」

[37] PP, 17: evam asaṅgatinyūnādhikyāny api pratijñāhetudṛṣṭāntasaṃbandhabhedena pratyekaṃ trividhāni.「同様に、(B)不適当、(C)不足、(D)余分も、提題・理由・実例との結びつきの区別によってそれぞれ三種ある。」

3. ジャヤティールタによるニヤーヤ議論学説の受容と批判

3.1. 論理的導出の過失の定義的説明

前節では、マドヴァ派の議論学説の概要を、推論の誤謬を含む敗北の根拠に関する言説を中心に確認した。マドヴァは少なくとも *Pramāṇalakṣaṇa* や *Anuvyākhyāna* において上述の六種の敗北の定義的説明を十分に行っていなかったが、ジャヤティールタは *Pramāṇapaddhati* において次のようにこれらを定義している。

> そのうち、適合性（yogyatā）の非存在が(A)矛盾である。期待（ākāṅkṣā）の欠如が(B)不適当である。必ず述べなければならないものの一部だけに言及することが(C)不足であり、近接（sannidhi）の非存在の一種である。期待されたものに他ならないが、別のものによって用済みなものに言及することが(D)余分である[38]。
>
> 異なって理解されている認識対象の承認が(E)同意である。相手を理解させるためのものであり必ず述べなければならないものを述べないことが(F)非言及である[39]。

興味深いことに、ジャヤティールタは論理的導出の過失である(A)矛盾、(B)不適当、(C)不足、(D)余分を、適合性（yogyatā）、期待（ākāṅkṣā）、近接（sannidhi）という意味論の観点から説明している[40]。おそらくこの記述は、ニヤーヤ学派のウダヤナの見解に依拠したものであろう。ニヤーヤ学派において二十二種の敗北の根拠は必ずしも全ての議論形態において指摘されるべきものとはされない[41]。この点に関して、ウダヤナは論議における敗北の根拠の位置付けを明らかにしている。すなわち、彼は *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* において二十二種の敗北の根拠それぞれを、論議において(1)決してありえるべきではないもの（asaṃbhāvanīyam eva）、(2)ありえたとしても決して指摘されるべきではないもの（saṃbhavad api anudbhāvyam eva）、(3)単に指摘されるべきもの（udbhāvyamātra）、(4)議論の終わりに属するもの（kathāvasānika）の四つに分類する[42]。そのうち、ウダヤナは(3)に分類される敗北の根拠を、適合性・期待・近接と関連

---

[38] PP, p. 293: tatra yogyatābhāvo virodhaḥ. ākāṅkṣāviraho ’saṅgatiḥ. avaśyavaktavyasyaikadeśamātravacanaṃ nyūnam, sannidhyabhāvaviśeṣaḥ. ākāṅkṣitasyaivānyena kṛtakāryasya vacanam ādhikyam.
Cf. NSudhā, p. 803: avaśyavaktavyāparipūrtir nyūnatvam. kṛtakāryatvam ādhikyam.「必ず述べなければならないものの不完全が不足していることである。用済みなものであることが余分であることである。」

[39] PP, p. 309: vipratipannaprameyāṅgīkāraḥ saṃvādaḥ. parabodhanārthasyāvaśyaṃ vaktavyasyāvacanam anuktiḥ.
Cf. PLṬ, p. 217: śaktivaikalyād vipratipannaprameyāṅgīkāraḥ saṃvādaḥ. vaktavye prāpte śaktivaikalyād eva tūṣṇīṃbhāvo ’nuktir iti.「能力が欠如しているがゆえの、異なって理解されている認識対象の承認が同意である。述べるべき状況になった際に、他ならぬ能力の欠如により黙り込むことが非言及である、という［意味である］。」

[40] 文章の意味理解の必須要素であるこの三種の概念については Raja [1969:150ff.] を参照。この概念はミーマーンサー学派の文意論に由来し、他の要素の追加などの変遷を辿りながら他学派においても広く受容された。

[41] この点に関するニヤーヤ学派内の見解の変遷については Sudo [2021a] に整理した。

[42] Cf. 小野 [2017:54]、Sudo [2021a].

付けて以下のように説明する。

> すなわち、「矛盾」の場合には適合性の欠如がある。「時宜を得ないもの」の場合には期待の欠如がある。「不足」の場合には期待されたものの非同時言及がある。また、それは非近接の一種である。「余分」の場合には期待されなかったものの同時言及がある。「再言」の場合も同様である。それもまた期待の欠如の一種である[43]。

ウダヤナによれば、真実を望むもの達による議論である論議において「矛盾」「時宜を得ないもの」「不足」「余分」「再言」がある場合、議論を終了させることはないにせよ、真実の理解を間接的に阻害するものであることから指摘される必要が生じる[44]。その場合、適合性・期待・近接という文意理解の必須要素が欠けていることが根拠とされている。両者の見解を整理すると以下のようになる（表5、名称が共通する項目に下線を引いた）。

表5　一部の敗北の根拠と適合性・期待・近接の欠如との関係

	ウダヤナ	ジャヤティールタ
適合性の欠如	矛盾	矛盾
期待の欠如	時宜を得ないもの、余分、再言	不適当
近接の欠如	不足	不足
期待されるが用済み	−	余分

ウダヤナは〈余分〉を期待の欠如の一種と位置付けたが、ジャヤティールタはおそらく（B）不適当と（D）余分との間の相違を明確にするため、後者を敢えて期待の欠如の文脈から除外している。ジャヤティールタがウダヤナの以上の見解を知っていたことは、彼が *Kathālakṣaṇaṭīkā* において同様の見解に否定的に言及していることからも明らかであろう[45]。このような理解がマドヴァによって意図されていたものであるかは定かではないが、少なくともジャヤティールタはウダヤナによる敗北の根拠に関する説明の手法を部分的に受け入れ、マドヴァが採用する敗北の根拠の分類の正当化を試みているといえる[46]。

3.2. 敗北の根拠（nigrahasthāna）の語義解釈

先行研究において、ジャヤティールタが *Pramāṇalakṣaṇa* への注釈中でニヤーヤ学派の

[43] NVTP ad NS 1.2.1, pp. 310–311: tathā hi virodhe yogyatāvirahaḥ. aprāptakāla ākāṅkṣāvirahaḥ. nyūna ākāṅkṣitāsamabhivyāhāraḥ. sa cānāsattiviśeṣaḥ. adhike ’nākāṅkṣitasamabhivyāhāraḥ. punarukte ’py evam. so ’py ākāṅkṣāvirahaviśeṣaḥ.

[44] なお、(3)単に指摘されるべきものには「復唱できないこと」「定説を離れたもの」も含まれるが、両者は別の角度から説明されている（Cf. NVTP ad NS 1.2.1, p. 311）。

[45] Cf. KLṬ, p. 118.

[46] ジャヤティールタは *Pramāṇapaddhati* において、ウダヤナの名に、少なくともニヤーヤ学派のプラマーナの定義を批判する文脈で一度、また、詭弁的論駁の定義的内容に言及する際に複数回言及している。

ヴァラダラージャによる *Tārkikarakṣā* に依拠して批判対象となる敗北の根拠の特徴を説明していることが指摘されている[47]。このことは、後代の注釈者達が *Tārkikarakṣā* を批判対象のソースとして逐一引用し、実際に両書の内容に顕著な一致が見られることから確からしい[48]。例えば、ジャヤティールタは以下のような「敗北の根拠」の語義解釈を行う。

> 「敗北」とは、議論における自尊心が破壊されていないある者による、他方の者の自尊心の破壊、［すなわち］打ち負かされである。その［敗北］のきっかけ、あるいは真実の無理解の証相が「敗北の根拠」である[49]。

このうち、「敗北」を定義する前半部はウダヤナの *Nyāyapariśiṣṭa* の文言とパラレルであるが[50]、ヴァラダラージャも *Sārasaṃgraha* において「［ウダヤナ］先生が次のように述べた」（yathoktam ācāryaiḥ）として同じ文を引用しており、なおかつ、続く「敗北の根拠」（nigrahasthāna）の解釈は「敗北」定義箇所に前後する *Tārkikarakṣā* 及び *Sārasaṃgraha* の

ただし、この点については注意が必要である。前者の場合、「プラマーナとは正しい認識に遍充されたものである」（pramāvyāptaṃ pramāṇam）という定義がウダヤナの名とともに言及され、ジャヤティールタはそれを否定した上で、同じものに「論証手段と基体のいずれかであり」（sādhanāśrayayor anyataratve sati）という限定要素を加える見解を想定反論として提示する（PP, p. 4）。しかしながら、限定要素を付した定義はウダヤナの影響を色濃く受けるヴァラダラージャの *Sārasaṃgraha* に見られるものの（SS, p. 7: sādhanāśrayayor anyataratve sati pramāvyāptaṃ pramāṇam）、ウダヤナ自身による「プラマーナとは正しい認識に遍充されたものである」という定義は管見の限り見当たらない（Cf. Shida [2015]）。また、詭弁的論駁の文脈においては、ジャヤティールタが何らかの反論を提示した上で、「それゆえ、～とウダヤナが述べている」という形で譲歩的にウダヤナの定義を示し、それに対して再反論を行う、という体裁がとられる（具体的には、apakarṣasama, varṇyasama, avarṇyasama, sādhyasama, pratidṛṣṭāntasama, prakaraṇasama, upapattisama, upalabdhisama, kāryasama に対する批判箇所）。ここで言及される定義についても、類似したものが *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* などに見られるものの、同一の定義は見当たらない。また、*Sārasaṃgraha* の内容を前提としているかのような表現もみられる。このことと関連して、シュリーニヴァーサティールタ（Śrīnivāsatīrtha, ca. 17c）やジャナールダナバッタ（Janārdana Bhaṭṭa, ca. 17c）などの後代のマドヴァ派の論師がジャヤティールタの著作を注釈する際に、しばしばヴァラダラージャの *Tārkikarakṣā* を引用している点についても留意すべきであろう。以上の点については、ジャヤティールタによる詭弁的論駁批判の検討とあわせて、別稿を期したい。

[47] Joshi [1987:26] “All the definitions of nigrahasthānas and Jātis stated by J[ayatīrtha] follow Tā[rkika]Ra[kṣā] only. ... J[ayatīrtha] has taken maximum help of Tārkikarakṣā to quote the views of others.”（下線は原文ママ。[] 内は筆者による補いである。また、当該箇所は原稿に手書きされているが、Joshi [1987] の場合、ナーガリー文字の筆記は手書きされており、当該箇所も *Tārkikarakṣā* と *Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* との平行箇所をナーガリー文字で記した箇所の一部であるため、原稿時点の内容と考えてよい。）

[48] Cf. 須藤 [2021b:76–77]. 詭弁的論駁に関する批判対象の帰属先を巡る問題については脚注 46 を参照。

[49] PLṬ, p. 133: kathāyām akhaṇḍitāhaṅkāreṇa pareṇa parasyāhaṅkārakhaṇḍanaṃ parājayo nigrahaḥ. tannimittaṃ tattvāpratipattiliṅgaṃ vā nigrahasthānam.

Cf. PP, p. 309: kathāyām akhaṇḍitāhaṅkāreṇa pareṇa parasyāhaṅkārakhaṇḍanaṃ parājayo nigraha iti cocyate.

[50] Cf. NP, p. 197: kathāyām akhaṇḍitāhaṅkāreṇa pareṇa[1] parasyāhaṅkārakhaṇḍanam[2] iha parājayo nigrahaḥ. [1] pareṇa] MT; om. Ed. [2] -khaṇḍanam] em.; -kaṇḍanam Ed.

文言のみから回収される[51]。それゆえ、当該箇所は確かにヴァラダラージャの見解を下敷きにしているようである。しかしながら、前節において確認したように、ジャヤティールタは、ヴァラダラージャのみならずウダヤナの著作をも利用している。その証左として、彼は敗北の根拠が過失とならない状況について、続けて以下のように説明している。

> また、これら［敗北の根拠として述べられたもの］でありながら、(1)議論外のもの、議論の最中であっても、(2)忘失や不注意などの状態によってもたらされたもの、(3)すぐに撤回されることで指摘する機会を逃したもの、(4)［審判などとして］任命されていない人に唐突に指摘されたものは、敗北の根拠ではない。その時点で真実を知らないことの証相であることについても対立する者に依拠しているので、その［真実を知らないこと］はないから[52]。

ウダヤナ及びヴァラダラージャのいずれもほとんど同じ説明を行うが、異なる術語が用いられ、とりわけ後者は「議論外のもの」に関する言及を欠く[53]。ヴァラダラージャは直前の箇所で *Tārkikarakṣā* の偈中の「議論において」（kathāyām）という語を過大適用の回避を目的とすると説明し、この意味で議論外のものを排除してはいるが、ここでジャヤティールタがウダヤナの *Nyāyapariśiṣṭa* の文言を念頭に置いていた可能性は高い。それゆえ、ジャヤティールタは、ウダヤナ及びヴァラダラージャに由来する文言を適宜組み合わ

---

[51] Cf. SS, p. 319: yathoktam ācāryaiḥ, kathāyām akhaṇḍitāhaṅkāreṇa parasyāhaṅkārakhaṇḍanam iha parājayo nigraha iti.

Cf. SS, p. 318: tataś ca tattvāpratipattiliṅgaṃ nigrahasthānam ity uktaṃ bhavati.「またそれゆえ、真実の無理解の証相が敗北の根拠と言われたことになる。」

Cf. TR, p. 319:

akhaṇḍitāhaṅkṛtinā parāhaṅkārakhaṇḍanam /
nigrahas tannimittasya nigrahasthānatocyate //

「自尊心が破壊されていない者による、相手の自尊心の破壊が敗北であり、その［敗北］のきっかけが敗北の根拠と言われる。」

また、*Pramāṇapaddhati* における次の説明も参照。PP, p. 309: paroktasvavaktavyayor ajñānaṃ viparītajñānaṃ vā nigrahaḥ, talliṅgaṃ nigrahasthānam iti vā.「あるいは、「相手が述べたことと自身が述べるべきことを知らないこと、あるいは誤って理解していることが「敗北」であり、その［敗北］の証相が「敗北の根拠」である」と［言われる］。」Cf. SS, p. 318: atra paroktasvoktayor ajñānam apratipattiḥ. tayor eva viruddhā pratipattir vipratipattiḥ.「この場合、相手が述べたことと自身が述べることを知らないことが無理解であり、同じ両者に関する逆の理解が誤った理解である。」なお、無理解（apratipatti）と誤った理解（vipratipatti）とは、*Nyāyasūtra* において敗北の根拠の大分類として述べられるものである。

[52] PLṬ, pp. 133–134: etāni ca kathābāhyāni, kathāyām apasmāronmādādidaśāpannāni, jhaṭiti saṃvaraṇena tirohitodbhāvanāvasarāṇi, puraḥsphūrtikānadhikṛtodbhāvitāni na nigrahasthānāni. tātkālikātattvajñānaliṅgatve 'pi pratiyogyapekṣayā tadabhāvād iti. (Cf. PP, p. 309: kathābāhyāni, kathāyām apy apasmāronmādādidaśāpannāni, jhaṭiti saṃvaraṇena tirohitodbhāvanāvasarāṇi, puraḥsphūrtikānadhikṛtodbhāvitāni ca vyavacchinnāni.)

[53] Cf. NP, p. 197: tenaiteṣām eva kathābāhyānām, kathāyām apy apasmāronmādādidaśāpannānām[1)], jhaṭiti saṃvaraṇena tirohitāvasarāṇām, puraḥsphūrtikānadhikṛtodbhāvitānāṃ ca vyavacchedaḥ. tathāvidhānāṃ tātkālikātattvajñānaliṅgatve 'pi pratiyogivyapekṣayāsujñatvaliṅgatvāt.

[1)] -daśā-] OMTBA$_N$; -vaśā Ed.

五四

せながら、マドヴァにより提起された自学派の敗北の根拠の概念を体系化するために用いていた、と言えよう。

3.3. 批判対象となるニヤーヤ学派の敗北の根拠の定義

ジャヤティールタの議論学史上の功績として、*Pramāṇapaddhati* 等の著作において、マドヴァ派における六種の敗北の根拠とニヤーヤ学派の二十二種の敗北の根拠との対応関係を明示し、マドヴァ派の議論学の伝統の独自性を宣揚している点が挙げられる。その際、彼が言及するニヤーヤ学派の敗北の根拠の定義は *Nyāyasūtra* の古典的定義ではない。例えば、語や文の意味を巡る誤謬である⑦意味を持たないもの（nirarthaka）、⑨意味が離れたもの（apārthaka）、⑥別の事柄（arthāntara）、⑫余分（adhika）に関して、*Pramāṇapaddhati* では以下の定義が想定されている（丸番号は *Nyāyasūtra* における列挙順を示す）。

意味を持たないもの：［意味を］表示しない語の使用[54]
意味が離れたもの：連関しない［意味を］表示する語などの使用[55]
別の事柄：問題となっているものに役立たないが、［意味が］連関している言及[56]
余分：［意味が］連関し、［問題となっているものに］役立ち、「再言」ではないが、用済みなものの使用[57]

この四種の敗北の根拠が、語や文が意味を表示するか否か、表示するとしてその意味が連関しているか否か、また、有意味である場合にその言明が論題に資するか否か、さらには、同じ役割を果たす別の言明によって用済みとなっていないか、という段階的なチェック機能を有するものであることが理解されよう（表 6）。

表 6　ジャヤティールタが言及するニヤーヤ学派の敗北の根拠の定義

	表示手段	連関	資する	
⑦意味を持たないもの	−			
⑨意味が離れたもの	○	−		
⑥別の事柄	(○)	○	−	
⑫余分	(○)	○	○	用済み

Nyāyasūtra などの段階ではこれらの〈敗北の根拠〉相互の異同に関する考察が不十分で

Cf. SS, pp. 319–320: tena kathāmadhye bhūtāveśāpannāni, jhaṭiti tirodhānena galitodbhāvanāvasarāṇi, puraḥsphūrtikāny anadhikṛtodbhāvanāni ca vyavacchinatti. pratiyogyapekṣayā tātkālikātattvajñānaliṅgasya nigrahasthānatvāt.「それにより、議論の最中に、取り憑かれることによってもたらされたもの、すぐに撤回されることで指摘する機会がなくなったもの、任命されていない人に唐突に指摘されたものを排除している。対立する者に依拠して、その時点で真実を知らないことの証相が敗北の根拠となるから。」

[54] PP, p. 19: avācakapadaprayogo nirarthakam.

[55] PP, p. 19: ananvitavācakapadādiprayogo ’pārthakam.

[56] PP, p. 19: prakṛtānupayuktānvitoktir arthāntaram.

[57] PP, p. 20: anvitopayuktāpunaruktakṛtakāryaprayogo ’dhikam.

あったため、仏教徒ダルマキールティによる批判にさらされることとなった。これに対して、ウダヤナはダルマキールティによる批判を念頭に置きつつ、二十二種の敗北の根拠の新たな定義的説明を *Nyāyapariśiṣṭa* 及び *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* において提示するに至る[58]。また、ヴァラダラージャの *Tārkikarakṣā* 及び *Sārasaṃgraha* における敗北の根拠の説明も彼の新定義に準拠したものとなっている。彼らが提示する定義的内容を比較すると、ここでもジャヤティールタがウダヤナ及びヴァラダラージャの提示した定義的説明を適宜組み替えて提示していることが分かる（表 7、ジャヤティールタ = J、ウダヤナ = U、ヴァラダラージャ = V）。

表 7　ジャヤティールタ、ウダヤナ、ヴァラダラージャによる敗北の根拠の定義の比較[59]

⑦	J	avācakapadaprayogo nirarthakam (PP, p. 19)
		abodhakaśabdaprayogo nirarthakam (PLṬ, p. 163)
	U	avācakaprayogo nirarthakam (NP, p. 208; NVTP, p. 592)
	V	avācakaprayoge syān nirarthakasamudbhavaḥ / (TR, p. 333)
		avācakapadaṃ prayuñjānasya vādino nirarthakaṃ nāma nigrahasthānaṃ bhavati. (SS, p. 333)
⑨	J	ananvitavācakapadādiprayogo ’pārthakam (PP, p. 19)
		ananvitārthavācakapadādiprayogo ’pārthakam (PLṬ, p. 169)
	U	ananvitārtham apārthakaṃ padajātaṃ vākyajātaṃ vā (NP, p. 210)
		niścitānanvayaṃ padajātaṃ vākyajātaṃ vāpārthakam (NVTP, p. 593)
	V	padajātaṃ vākyajātam ananvitam apārthakam // (TR, p. 338)
⑥	J	prakṛtānupayuktānvitoktir arthāntaram (PP, p. 19; PLṬ, p. 162)
	U	prakṛtaṃ sādhanaṃ dūṣaṇaṃ copakramya tadanabhidhānam arthāntaram (NP, p. 206)[60]
		prakṛtānupayuktārthābhidhānam arthāntaram (NVTP, p. 591)
	V	prakṛtānupayuktoktir arthāntaram iti sthitiḥ // (TR, p. 332)
⑫	J	anvitopayuktāpunaruktakṛtakāryaprayogo ’dhikam (PP, p. 20; PLṬ, p. 176)
	U	anvitam upayuktam apunaruktaṃ kṛtakartavyam abhidhīyamānam adhikam iha grāhyam. (NP, p. 214)
		upayuktāpunaruktānvitakṛtakartavyatābhidhānam adhikam (NVTP, p. 597)
	V	anvitasyopayuktasya punaruktetarasya yā /
		kṛtakāryakarasyoktir adhikaṃ tat pracakṣate // (TR, p. 344)
		anvitam upayuktam apunaruktaṃ kṛtakāryakaram abhidhīyamānam adhikaṃ nāma nigrahasthānam. (SS, p. 344)

[58] ウダヤナに帰せられる *Lakṣaṇamālā* においてもスートラ定義を離れた定義がしばしば見られるが、他の二作品における定義的説明との乖離が著しいものが少なくない。当該著作に著者問題が存在することも踏まえ、本稿ではこの作品は扱わない。

[59] 紙幅の都合上、翻訳については省略する。*Nyāyapariśiṣṭa* の和訳については小野 [2017] の対応箇所を参照。

[60] Cf. NP, p. 207: prakṛtopayuktam eva vācyam iti rahasyam.「問題となっているものに資するものだけを述べるべし，というのが極意である.」

ただし、細かくみると、ジャヤティールタが提示する定義的説明には他の敗北の根拠との区別を明示する文言が補足されているものがある（⑨ -vācaka-, ⑥ -anvita-）。先述の通り、分類上の重複に関する批判を避けるため、ウダヤナやヴァラダラージャによってもこれらの区別が試みられてはいるが、定義的説明には反映されていない。果たしてこの改変が、ジャヤティールタによるものであるか、テキスト上の問題であるのか、あるいは別の情報源によるものであるのか、現時点では定かではない。とはいえ、少なくともジャヤティールタによるニヤーヤ議論学説理解の正確さを評することはできるのではないであろうか[61]。

3.4. 六種の敗北の根拠との対応

ジャヤティールタはニヤーヤ学派において認められる二十二種の敗北の根拠のうち、まず「疑似的理由」を除く二十一種のそれぞれをマドヴァが提示した六種の敗北の根拠に還元させている（表 8、原則として *Pramāṇapaddhati* の記述に基づく）。

表 8　マドヴァ派とニヤーヤ学派の敗北の根拠の対応関係

マドヴァ派の六種の敗北の根拠	ニヤーヤ学派の二十一種の敗北の根拠
（A）矛盾[62]	④提題の放棄[63]、③提題の矛盾[64]、⑳批判すべきでないものへの批判（1. 曲解、2. 詭弁的論駁、3. 疑似的な［敗北の根拠］）[65]、㉑定説を離れたもの[66]
（B）不適当[67]	（②別の提題[68]、⑤別の理由[69]）、⑥別の事柄[70]、⑨意味が離れたもの[71]、（⑩時宜を得ないもの[72]）、⑭復唱できないこと（4）[73]、⑱見解の承認[74]、⑳批判すべきでないものへの批判（1. 曲解、4. 時宜を得ない［敗北の根拠］の把握）[75]
（C）不足	⑪不足[76]、⑭復唱できないこと（1,2,3）[77]
（D）余分	⑫余分[78]、⑬再言[79]
（E）同意	①提題の破棄[80]
（F）非言及	⑦意味を持たないもの[81]、⑧意味が理解されないもの[82]、⑭復唱できないこと（5）[83]、⑮無知[84]、⑯思い付かないこと[85]、⑰投げ出し[86]、⑲批判すべきものの看過[87]

[61] 他の敗北の根拠の定義の比較については省略したが、いずれの場合も、ジャヤティールタが提示する定義はウダヤナあるいはヴァラダラージャの著作中に原型が見られる。ただし、典拠となりうる資料にはばらつきがある。ジャヤティールタがこれらの資料を比較しつつ適切と思われる定義を選択･改変したのか、あるいは、ウダヤナ及びヴァラダラージャの定義を前提とした何らかの資料が存在したのか、という点についてはより慎重に検討されるべきであろう。 なお、ジャヤティールタは *Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* において *Pramāṇapaddhati* よりも詳細に敗北の根拠のさらなる下位区分や具体例について言及している。ただし、その箇所では定義と下位区分、具体例が示されるのみであり、それらがマドヴァ派の六種の敗北の根拠と対応する点については別の箇所で言及される。さらに興味深いことに、そこでは二十二種の敗北の根拠に㉓疑似的喩例（udāharaṇābhāsa）、㉔タルカによる否定（tarkaparāhati）の二種が加えられている。当該箇所の分析が、ジャヤティールタの情報源をより明らかにするための何らかの手がかりとなることが期待される。

[62] PLṬ, p. 254: tad anena pratijñāsaṃnyāsavirodhāpasiddhāntānāṃ niranuyojyānuyoge ca jāteḥ virodha evāntarbhāvaḥ sūcito bhavati.「それゆえ、これにより、④提題の放棄、③矛盾、㉑定説を離れたもの、⑳批判すべきでないものへの批判のうち、詭弁的論駁が他ならぬ(A)矛盾に含まれると示唆されたことになる。」

[63] PP, p. 19: so ’pi pramāṇavirodha eva, ukteḥ pramitatvāt.「それもまた認識手段との矛盾に他ならない。言明は認識されるものであるから。」

このうち、ウダヤナが期待の欠如の一種とした⑫余分、⑬再言が(D)余分として統合され、同じく期待の欠如に分類された⑩時宜を得ないものが他の敗北の根拠とともに(B)不適当というニヤーヤ議論学説にはみられない新たなカテゴリーに内包されていることが分かる。

一方、ニヤーヤ学派において敗北の根拠に含まれる㉒疑似的理由については、その処理

---

[64] PP, p. 19: ayaṃ ca prathamajātitvāt svavacanavirodha eva.「またこれは第一の詭弁的論駁であることから、自身の発言との矛盾に他ならない。」

[65] ジャヤティールタは⑳批判すべきでないものへの批判の下位区分として、1. 曲解（chala）、2. 詭弁的論駁（jāti）、3. 疑似的な〈①破棄〉など（hānyādyābhāsa）、4. 時宜を得ないものの把握／言及（aprāptakāle grahaṇam）という四種を挙げる。同様の分類は古くはウダヤナの *Nyāyapariśiṣṭa* に見られ、ヴァラダラージャも同じ下位区分を採用する（Cf. NP, p. 223: sa caturvidhaḥ, chalaṃ jātir ābhāso 'navasaragrahaṇaṃ ceti.; TR, p. 356: aprāptakāle grahaṇaṃ hānyādyābhāsa eva ca / chalāni jātaya iti catasro 'sya vidhā matāḥ //）。とりわけ、ヴァラダラージャの *Tārkikarakṣā* と名称の一致が見られる。このうち、ジャヤティールタはまず曲解を（B）不適当に分類する（Cf. PP, p. 21: etad asaṅgatam. vivakṣitadūṣaṇasyaivākāṅkṣitatvāt.「これは不適当なものである。［相手が］意図したものに対する論難のみが期待されることから。」）。ただし、（A）矛盾の一種である〈自身の論理との矛盾〉にも含まれるとする（Cf. PP, p. 21: svanyāyavirodhe 'py antarbhavati chalam.「曲解は自身の論理との矛盾にも含まれる。」）。また、詭弁的論駁はニヤーヤ学派において二十四種の下位区分が設けられるが、ジャヤティールタはその全ての内容を *Pramāṇapaddhati* 及び *Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* において詳細に分析している。当該箇所の検討は別の機会に行うが、凡そ〈自身の論理との矛盾〉に分類される。ただし、表 4 で提示した三種の詭弁的論駁に画一的に分類されるわけではなく、承認の状況によって vyāptyabhāva などにも分類されうるようである。なお、詭弁的論駁の定義的説明として言及されるものは、ウダヤナの *Nyāyapariśiṣṭa* の記述と一致している（Cf. PP, p. 21; 小野 [2017:19–20;251]）。また、〈疑似的な〈①破棄〉など〉については(A)矛盾の一種である〈認識手段との矛盾〉に分類される（PP, p. 26: sa pramāṇavirodha eva, hānyādyābhāsasya prāśnikādibhiḥ pramitatvāt.「それは認識手段との矛盾に他ならない。疑似的な〈①破棄〉などは審判などによって認識されるものであることから。」）。*Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* においても、これを(B)不適当に分類するマドヴァの見解に従いながらも、(A)矛盾にも含まれるとしている（Cf. PLṬ, pp. 314–316）。また、時宜を得ないものの把握は(B)不適当に含まれるとされる（PP, p. 27: udbhāvanakālam aprāpyātikramya vā nigrahasthānodbhāvanam aprāptakāle grahaṇam. tad asaṅgatam eveti.「指摘する時を待たずして、あるいは［それを］過ぎて、敗北の根拠を指摘することが〈時宜を得ないものの把握〉である。それは不適当なものに他ならない。」, cf. NP, p. 224）。

[66] PP, p. 27: apasiddhāntas tu svavacanavirodha eva.「しかし、定説を離れたものは自身の発言との矛盾に他ならない。」

[67] 興味深いことに、*Pramāṇapaddhati* において(F)非言及に分類される⑦意味を持たないもの、⑧意味が理解されないもの、⑲批判すべきものの看過は、*Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* において(B)不適当に分類される。ただし、表 8 は *Pramāṇapaddhati* の記述に依拠して整理したため反映させていない。この相違が何に由来するのかは現時点では定かではない。Cf. PLṬ, p. 317: uktād anyad api nigrahasthānaṃ kiṃcid asaṅgatam eva. yathārthāntaram. prakṛtopayogina eva saṅgatatvāt. parabodhārthaṃ pravṛttasya tadaṅgapadaprayoga eva saṅgata iti nirarthakam api. ata evāvijñātārtham. apārthakasya sphuṭas tatrāntarbhāvaḥ. aprāptakāle tv avayavaviparyāsādi nigrahasthānam eva na bhavati, arthāvirodhāc chandobhaṅgādivat. arthavirodhy asaṅgatam eva. vivakṣitakramānullaṅghane hi saṅgatiḥ syāt. anyathānubhāṣaṇaṃ ca, uktānuvādasyaiva saṅgatatvāt. prāptadūṣaṇodbhāvanasyaiva saṅgatatvena paryanuyojyopekṣaṇam apy asaṅgatam eveti.「述べたものとは別の特定の敗北の根拠も不適当なものに他ならない。すなわち、⑥別の事柄は［(B) 不適当である］。問題となっていることに役立つもののみが適当であることから。相手を理解させるために発動する者にとって、その［相手の理解］の必須要素である語の使用のみが適当であるので、⑦意味を持たないものも［(B)不適当である］。同じ理由で、⑧意味が理解されないものは［(B)不適当である］。⑨意味が離れたものは、明らかにそれに含まれる。一方、⑩時宜を得ないものの場合、支分の逆転などは必ずしも敗北の根拠とはならない。意味が矛盾していないから。韻律の損壊などのように。意味が矛盾するものが不適当なものに他ならない。すなわち、意図した順序を超え出ない場合に適当であろう。また、⑭(4)別の仕方で復唱することは［(B) 不適当である］。述べたものの再言及こそが適当であるから。論難するに至ったものを指摘することこそが適当であるので、⑲批判すべきものの看過も不適当なものに他ならない。」

の方法が問題となる。*Nyāyasūtra* によれば疑似的理由には五種の下位区分が認められるが、これに〈未決定なもの〉を加えるバーサルヴァジュニャに代表されるように、五種以上の下位区分を説くニヤーヤ学派の論師も存在していた。そのような事情を反映するかのように、ジャヤティールタは批判対象として以下のような疑似的理由の分類を想定する。

---

[68] PP, p. 18: asaṅgatyādikam iti brūmaḥ.「(B)不適当などであると我々は述べる」ただし、ジャヤティールタは論議においてこの敗北の根拠は存在しないと述べる。Cf. PP, p. 18: vāde tu kathaikye ’pi na nigrahasthānam. śaṅkānivṛttiparyantaṃ prati vaktavyatvāt.「一方、論議の場合、議論が同一であっても［別の提題は］敗北の根拠ではない。疑惑がなくなるまで述べるべきであるから。」

[69] PP, p. 19: etat pratijñāntaranirāsenaiva nirastam.「これは②別の提題の否定のみによって否定された。」ジャヤティールタは、②提題の破棄という場合の「提題」(pratijñā) という言葉が「述べたもの」(ukta) を提喩しているとすれば⑤別の理由は別立てされるべきではなく、提喩しないとすれば、「別の喩例」なども述べられるべきであると批判している (Cf. PP, p. 19)。

[70] PP, p. 19: idam anākāṅkṣitatvād asaṅgatir eveti.「これは期待されないことから(B)不適当に他ならないと［言われる］。」

[71] PP, p. 19: idaṃ ca sphuṭam asaṅgatam.「また、これは明らかに不適当なものである。」

[72] PP, p. 19: nigrahasthānaṃ tv asaṅgatir eva.「一方、敗北の根拠としては(B)不適当に他ならない」なお、ジャヤティールタによるこの分類は譲歩的なものであり、支分の順序の逆転としての⑩時宜を得ないものは実際には敗北の根拠ではないとされる (Cf. PP, p. 19)。

[73] PP, p. 20: caturtham asaṅgatam.「四番目のものは不適当なものである。」⑭復唱できないことの下位区分については脚注 77 を参照。

[74] PP, p. 20: iyam asaṅgatir eva.「これは(B)不適当に他ならない。」

[75] 脚注 65 を参照。

[76] PP, p. 20: etan nyūnam eva.「これは(C)不足に他ならない。」

[77] ジャヤティールタは⑭復唱できないことの五つの下位区分に言及する。すなわち、1. 指示代名詞などによる再言及 (yattadityādyanuvāda)、2. 論難対象の一部の再言及 (dūṣyaikadeśānuvāda)、3. 論難への言及のみ (kevalaṃ dūṣaṇoktiḥ)、4. 別の仕方での再言及 (anyathānuvāda)、5. 黙り込み (tūṣṇīṃbhāva) の五種である (PP, p. 20)。同様の分類は古くはウダヤナの *Nyāyapariśiṣṭa* に見られ、ヴァラダラージャも同じ下位区分を採用する (Cf. NP, p. 217: tathā ca tadityādisarvanāmnānuvādena vaikadeśānuvādena *vāyathānu-vādena (vāyathā-] OMT; vā viparīta- Ed.) vā kevaladūṣaṇoktyā vā stambhena veti pañcadhā vibhāvyate.; SS, p. 348: tadityādisarvanāmnānuvādo dūṣyaikadeśānuvādo *’yathānuvādaḥ (’yathā-] em.; yathā Ed.) kevaladūṣaṇoktiḥ stambhanaṃ ceti pañcāpy ananubhāṣaṇatvena saṃgṛhyante.)。ジャヤティールタはこの五つのうち、最初の三種を不足に分類する (Cf. PP, p. 20: tatrādyatrayaṃ nyūnam.「そのうち、最初の三つは(C)不足である。」)。

[78] PP, p. 20: etad adhikam eva.「これは(D)余分に他ならない。」

[79] PP, p. 20: etad adhikam eva.「これは(D)余分に他ならない。」

[80] PP, p. 18: ayaṃ tu saṃvāda eva.「しかし、これは(E)同意に他ならない。」また、*Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* によれば、提題の意味内容に着目すれば(B)不適当にも分類されうる。Cf. PLṬ, p. 320: yathā pratijñāhāniḥ saṃvāde ’ntarbhavati. arthato hānir asaṅgatāv api. prakṛtadoṣaparihāre prāpte ’nyathāstv ity asya saṅgatyadarśanāt.「すなわち、①提題の破棄は(E)同意に含まれる。意味に基づけば、①破棄は(B)不適当にも［含まれる］。問題とされている過失を排除する際に、「別の仕方であってもかまわない」というようなこの［①破棄］に適当さは見られないから。」

[81] PP, p. 19: idaṃ tv anuktir eva.「しかし、これは(F)非言及に他ならない。」

[82] PP, p. 19: idam apy anuktir eva.「これも(F)非言及に他ならない。」

[83] PP, p. 20: pañcamam anuktiḥ.「五番目のものは(F)非言及である。」⑭復唱できないことの下位区分については脚注 77 を参照。

[84] ⑮無知、⑯思い付かないこと、⑰投げ出しの三種の敗北の根拠について、ジャヤティールタは *Pramāṇapaddhati* においてそれぞれの定義（及び具体例）に言及した上で、まとめて非言及に分類する (Cf. PP, p. 20: etat trayam anuktir eva.「以上の三つは(F)非言及に他ならない。」)。

[85] 脚注 84 を参照。

[86] 脚注 84 を参照。

[87] PP, p. 20: idam apy anuktāntargatam.「これも(F)非言及に含まれる。」

また、それら［疑似的理由］は 1. 成立しないもの（asiddha）、2. 矛盾するもの（viruddha）、3. 一方に定まらないもの（anaikāntika）、4. 未決定なもの（anadhyavasita）、5. 時宜を過ぎて示されたもの（kālātyayāpadiṣṭa）、6. 対立主張を有するもの（satpratipakṣa）、7. 論題と等しいもの（prakaraṇasama）である[88]。

この分類は *Nyāyasūtra* とは一致せず、(4) 未決定なものを独立に列挙している点でバーサルヴァジュニャの見解を想起させる。しかしながら、ニヤーヤ学派において原則として同内容のものとされる (6) 対立主張を有するものと (7) 論題と等しいものを別立てしている点で興味深い分類である。なお、*Pramāṇapaddhati* において、前者は矛盾する論証対象をもつ推論と対等な力関係をもつ推論（あるいは理由）とされ、所謂、相違決定（*viruddhāvyabhicārin*）と同じものである[89]。一方、後者としては、「疑われているものは誤りである」云々といった、自他いずれにおいても成立する同一の推論でありながらその意味内容を考慮すれば両者にとって矛盾する推論が想定されている[90]。ジャヤティールタは以上の疑似的理由のさらなる下位区分にも言及し、自派の六種の敗北の根拠との対応を明示している。*Pramāṇapaddhati* の記述に依拠してその対応関係を示すと以下のようになる（表 9）。

表 9　ジャヤティールタが想定するニヤーヤ学派の疑似的理由の下位区分とその対応

批判対象となるニヤーヤ学派の疑似的理由の下位区分			六種との対応
1. 成立しないもの[91]	所遍性が成立しないもの[92]	論証対象との関係を欠くもの[93]	（A）理由の矛盾（不遍充（c））
		わきにあるものを有する関係[94]	（A）理由の矛盾（不遍充（a））、提題の矛盾（等力なものとの矛盾）
	拠り所が成立しないもの[95]	拠り所の非存在[96]	独立の疑似的理由ではない
		既に成立しているものの論証[97]	（B）不適当
	主題所属性が成立しないもの[98]	別の拠り所で成立するもの[99]	過失ではない
		無意味な限定要素をもつがゆえに成立しないもの[100]	（D）余分
		無意味な被限定要素をもつがゆえに成立しないもの[101]	（D）余分
		限定要素がよく知られていないがゆえに成立しないもの[102]	独立の疑似的理由ではない
		その他の主題所属性が成立しないもの[103]	（A）理由の矛盾（不成立）
	以上の［所遍性・拠り所・主題所属性］に関する認識が成立しないもの[104]		（A）理由の矛盾（不成立）

四八

[88] PP, p. 27: te cāsiddhaviruddhānaikāntikānadhyavasitakālātyayāpadiṣṭasatpratipakṣaprakaraṇasamāḥ. Cf. PLṬ, p. 125.

[89] Cf. PP, pp. 28–29.

[90] Cf. PP, p. 29. この種の推論の誤謬については須藤 [2020] を参照。

2. 矛盾するもの [105]		（A）理由の矛盾（不遍充（b））
3. 一方に定まらないもの [106]		（A）理由の矛盾（不遍充（a））
4. 未決定なもの [107]	同類と異類を欠くもの	（A）理由の矛盾（不遍充（c））
	［同類・異類の］両方をもつもの	
	同類をもち異類を欠くもの	
5. 時宜を過ぎて示されたもの [108]		（A）提題の矛盾（強力な認識手段との矛盾）
6. 対立主張を有するもの [109]		（A）提題の矛盾（等力な認識手段との矛盾）
7. 論題と等しいもの [110]		（A）提題の矛盾（等力なものとの矛盾）

[91] PP, p. 27: sa caturvidhaḥ, vyāpyatvāsiddha āśrayāsiddhaḥ pakṣadharmatvāsiddha etatpramityasiddhaś ceti.「それは四種であり、所遍性が成立しないもの、拠り所が成立しないもの、主題所属性が成立しないもの、以上の［所遍性・拠り所・主題所属性］に関する認識が成立しないものである。」asiddha の語義解釈も含めて、同内容のものが *Tārkikarakṣā* にみられる。

[92] PP, p. 27: tatra vyāpyatvāsiddho dvividhaḥ, sādhyasaṃbandharahitaḥ sopādhikasaṃbandhaś ceti.「そのうち、所遍性が成立しないものは二種であり、論証対象との関係を欠くものとわきにあるものを有する関係とである。」

[93] PP, p. 27: ayam ubhayasaṃbandhābhāvād avyāptāv antarbhūtaḥ.「これは［論証対象と論証対象の非存在との］両方との関係が存在しないので、不遍充に含まれる。」なお、ここでの論証例は「一切は刹那的なものである」(sarvaṃ kṣaṇikam)という仏教的なものであり、主題に一切が含まれるため、同類と異類が空集合となる。

[94] PP, p. 27: tathā ca sopādhikasyāvyāptau pratijñāyāḥ samabalavirodhe cāntarbhāvaḥ.「すなわち、わきにあるものを有するものは、不遍充と〈提題の等力なものとの矛盾〉に含まれる。」

[95] PP, p. 27: āśrayāsiddho 'pi dvividhaḥ, asadāśrayaḥ siddhasādhanaś ceti.「拠り所が成立しないものも二種であり、拠り所が存在しないものと既に成立しているものの論証とである。」

[96] PP, pp. 27–28: pramāṇavirodhādyasaṅkīrṇodāharaṇābhāvād ayaṃ hetvābhāsa eva na bhavati.「認識手段との矛盾などと混じり合わない実例が存在しないので、他ならぬこの疑似的理由は存在しない。」

[97] PP, p. 28: ayam asaṅgatāv antarbhavati. anākāṅkṣitasādhanāya pravṛttatvāt.「これは（B）不適当に含まれる。期待されない論証のために発動することから。」

[98] 実際には、主題所属性が成立しないものの下位区分は限定されていない（Cf. PP, p. 28: pakṣadharmatvāsiddho 'nekadhā.「主題所属性が成立しないものは多種ある。」）。

[99] PP, p. 28: tatra vyadhikaraṇāsiddho na dūṣaṇam ity uktam eva.「そのうち、別の拠り所で成立するものは過失ではないと既に述べた。」

[100] PP, p. 28: vyarthaviśeṣaṇāsiddho vyarthaviśeṣyāsiddhaś cādhikye 'ntarbhavataḥ.「無意味な限定要素をもつがゆえに成立しないものと無意味な被限定要素をもつがゆえに成立しないものとは(D)余分に含まれる。」

[101] 脚注 100 を参照。

[102] PP, p. 28: aprasiddhaviśeṣaṇāsiddhis tu doṣāntarāsaṅkīrṇodāharaṇābhāvān na hetvābhāsaḥ.「一方、限定要素がよく知られていないがゆえに成立しないものは、別の過失と混じり合わない実例が存在しないので疑似的理由ではない。」

[103] PP, p. 28: itaraḥ pakṣadharmatvāsiddho 'siddhāv antarbhavati.「それ以外の主題所属性が成立しないものは不成立に含まれる。」

[104] PP, p. 28: asyāpy asiddhir eva.「これも不成立に他ならない。」

[105] PP, p. 28: ayam api sādhyasaṃbandhābhāve sati tadabhāvasaṃbandhitvād avyāptaḥ.「これも、論証対象との関係が存在せず、かつその［論証対象］の非存在と関係するものであることから、遍充されないものである。」

[106] PP, p. 28: ayam api sādhyatadabhāvasaṃbandhitvād avyāpta eva.「これもまた論証対象とその［論証対象］の非存在と関係することから、遍充されないものに他ならない。」

以上のように、ジャヤティールタはニヤーヤ学派が認める疑似的理由の分類を逐一取り上げ、それらが(A)矛盾を主とするマドヴァ派の敗北の根拠の枠組みにおいても処理されうることを明らかにしている[111]。また、一部については疑似的理由の範疇から外れている点をも指摘している。ただし、より詳細な下位区分が言及される *Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* における疑似的理由の構造には *Pramāṇapaddhati* との相違が見られ、両書で想定されているニヤーヤ学派の見解が異なるものであることが予想される[112]。いずれにしても、ジャヤティールタがニヤーヤ学派の論理学説・議論学説を主たる対立見解として捉え、マドヴァの分類の正当性を実証しようと試みていたことが明らかとなった。実際、ジャヤティールタは *Nyāyasudhā* において、マドヴァが *Anuvyākhyāna* で提示する〈提題内容の矛盾〉〈証相の欠如〉〈不遍充〉という三種の(A)矛盾が、それぞれ〈時宜を過ぎたもの〉〈論題と等しいもの〉、〈不成立〉、〈未決定なもの〉〈一方に定まらないもの〉〈矛盾するもの〉と同一であるとすれば、同じものを別の語で述べているに過ぎない、というニヤーヤ学派的な反論を想定している[113]。この批判に対して、ジャヤティールタは、以上述べてきた主旨、すなわちマドヴァが承認する六種の敗北の根拠によってニヤーヤ学派の認める曲解や詭弁的論駁を含むあらゆる敗北の根拠が内包され、あるいは適切に処理される点を述べることによって回答する。以上のように、ジャヤティールタは、様々な著作に散りばめられたマドヴァの議論学・論理学に関する思想を体系的に構築し、ウダヤナやヴァラダラージャといったニヤーヤ学派の思想家を主たる論敵として想定しつつ、ニヤーヤ議論学説に対抗しうるマドヴァ派独自の議論における勝敗規則を作り上げようと試みたといえる。

4. 結　論

本稿では、マドヴァ派の議論学説における議論の勝敗規則、すなわち敗北の根拠の位置付けを明らかにするために、マドヴァ及びジャヤティールタの著作を中心に検討した。マ

---

[107] PP, p. 28: sa trividhaḥ. tatra sapakṣavipakṣarahito ..., ubhayavān ..., sapakṣavān vipakṣarahito ... .「それは三種である。そのうち、同類と異類を欠くものは……、両方をもつものは……、同類をもち異類を欠くものは……である」; PP, p. 28: sarvathāvyāptāv antarbhavati, ubhayasaṃbandhābhāvāt.「いずれにせよ、不遍充に含まれる。［論証対象と論証対象の非存在との］両方との関係が存在しないから。」

[108] PP, p. 28: ayaṃ pratijñāyāḥ prabalapramāṇavirodha eva.「これは〈提題の強力な認識手段との矛盾〉に他ならない。」

[109] PP, p. 29: ayaṃ pratijñāyāḥ samabalapramāṇavirodha eva.「これは〈提題の等力な認識手段との矛盾〉に他ならない。」〈対立主張を有するもの〉と〈わきにあるものをもつもの〉との関係については *Nyāyasudhā* においても詳細な議論が為される。

[110] PP, p. 29: ayam api pratijñāyāḥ samabalavirodha eveti.「これも、提題の等力なものとの矛盾に他ならない。以上。」

[111] なお、ジャヤティールタは、疑似的主張及び疑似的実例についても、それらを疑似的理由の枠組みに分類するニヤーヤ学派の一般的な見解を否定しつつ、マドヴァ派における六種の敗北の根拠の枠組みの中で処理しようと試みている。

[112] Cf. PLṬ, pp. 196–212.

[113] 当該箇所では〈提題内容との矛盾、証相の欠如、不遍充〉という区分が *Brahmatarka* などの論理学の著作（tarkaśāstra）の内容に依拠したものであることが示唆される（Cf. NSudhā, pp. 801–802）。

ドヴァは推論を「過失のない論理的導出」と定義し、「論理的導出の過失」として（A）矛盾、（B）不適当、（C）不足、（D）余分の四種を提示した。さらに、上記の四種に（E）同意、（F）非言及を加えた六種を「敗北」の分類とし、議論における独自の勝敗規定を提示した。ただし、マドヴァの分類は *Brahmatarka* に基づく簡潔なものであり、その下位区分に著作間での齟齬が見られるなど、十分に体系化されたものとは言えなかった。

これに対して、ジャヤティールタはマドヴァの見解を引き継ぎつつ、詳細な分析を加えた。彼は論理的導出の過失を（1）推論に立脚したものと（2）議論の在り方に共通するものとに区別し、推論の誤謬が議論の領域に拡大適用されうることを明確にした。さらに、マドヴァの見解を下敷きとして、六種の敗北を「意味の過失」（＝ A、B）、「発言の過失」（＝ C、D）、「話者の過失」（＝ E、F）として特徴付けた。

また、ジャヤティールタのインド議論学史における貢献として、マドヴァの議論学説とニヤーヤ学派のウダヤナの議論学説との接合を図っている点が挙げられる。すなわち、彼は論理的導出の過失に相当する四種の敗北の根拠を定義するにあたり、論議における敗北の根拠を適合性、期待、近接という文意論の観点から位置付けるウダヤナの見解を一部改変して用いていた。ジャヤティールタの議論学説に触れる先行研究には、一部の注釈に逐一報告されるヴァラダラージャの著作との対応関係を念頭に置くものが多い。本稿では、ジャヤティールタが、ヴァラダラージャの見解のもととなったウダヤナの *Nyāyapariśiṣṭa* や *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi* をも参照しつつ、自身の議論学説を組み上げた可能性を指摘した。また、敗北の根拠の語義解釈などにあたっても、ジャヤティールタはウダヤナ及び彼の影響を受けるヴァラダラージャの議論学説を無批判に受け入れている。その意味では、ニヤーヤ議論学説の到達点ともいえるウダヤナの見解の卓越性が彼によっても部分的に承認されていたと理解することができる。

一方、ジャヤティールタはニヤーヤ学派において認められる、詭弁的論駁、曲解を含む二十二種の敗北の根拠に対して、マドヴァ派における六種の敗北の根拠との対応関係を明示することにより、ニヤーヤ議論学説を徹底的に批判した。このような態度は、マドヴァ自身によっても *Kathālakṣaṇa* の記述などから理解されるが、あくまで漠然とした言及に過ぎない。それに比して、ジャヤティールタは独立の著作である *Pramāṇapaddhati* のほか、マドヴァの著作への注釈である *Pramāṇalakṣaṇaṭīkā* 及び *Nyāyasudhā* においてかなり具体的な検討を行っていた。本稿では *Pramāṇapaddhati* に示される基本的な構造を提示することしかできなかったが、ジャヤティールタのニヤーヤ議論学説の理解の正確さと彼の批判の緻密さをうかがい知ることが出来よう。ただし、対応関係の分類や想定される疑似的理由の下位区分などについては著作間で異なる見解が提示されている箇所も見られる。これらの齟齬がどのように解消されうるのか、あるいはされないのかという点についてはさらなる検討を要する。

また、本稿では、ジャヤティールタの注釈に対する膨大な数の複注を十分に参照することはできなかった。それらの資料を活用することで、ジャヤティールタが批判対象としていたニヤーヤ議論学説の同定をさらにすすめることも可能となろう。くわえて、ジャヤティールタによる詳細な詭弁的論駁の下位区分に対する解説及び分類上の批判についても、本稿では扱えなかった。これらの点については、マドヴァ派ひいてはヴェーダーンタ学派における議論学説の展開を明らかにする意味でも今後検討したい。

参考文献

一次文献

Anuvyākhyāna

[AV] *Śrīmadānandatīrthabhagavatpādācāryaviracitaśrīmadanuvyākhyānayutā Śrīmaṭṭīkākṛtpāda(śrīmajjayatīrtha)viracitā Śrīman-Nyāyasudhā: Śrīmadrāghavendragurusārvabhaumaviracitaparimalavyākhyāsamalaṅkṛtā.* Ed. H. K. Ranganathacarya. Mulabagalu: 1983, 1985, 1986.

Kathālakṣaṇa

[KL] *Kathālakṣaṇam (The Art of Philosophical Debate).* Ed. L.S. Vadirajacharya. Bangalore: Dvaita Vedanta Studies and Research Foundation, 2010.

Kathālakṣaṇaṭīkā

[KLṬ] See *Kathālakṣaṇa*.

Nyāyapariśiṣṭa

[NP] See 小野 [2017].

Nyāyasudhā

[NSudhā] See *Anuvyākhyāna.*

Nyāyasūtra

[NS] *Gautamaīyanyāyadarśana with Bhāṣya of Vātsyāyana.* Ed. Anantalal Thakur. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1997.

Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi

[NVTP] *Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi of Udayanācārya*. Ed. Anantalal Thakur. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1996.

Nyāyavārttikatātparyaṭīkā

[NVTṬ] *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā of Vācaspatimiśra*. Ed. Anantalal Thakur. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1996.

Pramāṇalakṣaṇa

[PL] *Pramāṇalakṣaṇa of Śrī Ānandatīrtha with the commentary of Śrī Jayatīrtha, & sub-commentaries of Śrī Rāghavendratīrtha, Śrīnivāsatīrtha, Śrī Pāṇḍurangi Keśavāchārya.* Ed. Sri Venkannacharya Katthi. Bangalore: Dvaita Vedanta Studies and Research Foundation, 2013 (2nd Edition).

Pramāṇalakṣaṇaṭīkā/Nyāyakalpalatā

[PLṬ] See *Pramāṇalakṣaṇa.*

Pramāṇapaddhati

[PP] *Pramāṇa Paddhati of Śrī Jayatīrtha – with Eight Commentaries.* Ed. K. T. Pandurangi. Bangalore: Dvaita Vedanta Foundation, 2014 (3rd Revised Edition).

Tārkikarakṣā/Sārasaṃgraha

[TR/SS] *The Tārkikarakṣā and Sārasaṃgraha of Varadarāja with Mallinātha Sūri's Niṣkaṇṭhaka and Jñānapūrṇa's Laghudīpikā.* The Pandit 21–25, Varanasi, 1899–1903.

Viṣṇutattvanirṇaya

[VTN] *Sarvamūlagranthāḥ.* Ed. Bannanje Govindacharya, Vol. 5. Udupi: Sri Dharmabodha Vidyunmudranalaya, 1974.

二次文献

EIP

[1970] *Encyclopedia of Indian Philosophies Vol. I: Bibliography.* Karl H. Potter (Ed.). Delhi: Motilal Banarsidass Publishers. (Cf. https://faculty.washington.edu/kpotter/xhome.htm.)

[2015] *Encyclopedia of Indian Philosophies Vol. XVIII: Dvaita Vedānta Philosophy.* Karl H. Potter (Ed.). Delhi: Motilal Banarsidass Publishers.

Inamdar, V. B.

[1962] *A Critical Study of the Dvaita Vedānta as Expounded by Śrī Jayatīrtha.* PhD diss., University of Poona.

Joshi, Prakash Vasudeo

[1987] *Pramāṇalakṣaṇa of Madhva with Jayatīrtha's Commentary (Translation and Critical Study).* PhD diss., University of Poona.

Mesquita, Roque

[2014] "Rejoinder II: Madhva's Unknown Literary Sources." *Rivista degli studi orientali Nuova Serie,* 87 (1/4): 31–55.

[2016] *Studies on Madhva's Viṣṇutattvanirṇaya.* New Delhi: Aditya Prakashan.

Nāgarāja Rao, P.

[1976] *The Epistemology of Dvaita Vedānta. Madras:* The Adyar Libraly and Research Centre.

Ono, Takuya（小野　卓也）

[2017] 「インド古典討論術研究―ウダヤナ『ニヤーヤ・パリシシュタ』における詭弁と敗北の場合―」PhD diss., 東京大学.

Raja, K. Kunjunni

[1969] *Indian Theories of Meaning. Madras:* The Adyar Library and Research Centre. (2nd Edition 1969; Reprint 1977).

Sarma, Deepak

[2003] *An Introduction to Mādhva Vedānta.* Ashgate World Philosophies Series. London: Routledge.

[2005] *Epistemologies and the Limitations of Philosophical Inquiry: Doctrine in Mādhva Vedānta*. Routledge Hindu Studies Series. London: Routledge.

Sarma, R. Naga Raja
[1937] *Reign of Realism in Indian Philosophy.* Madras: The National Press.

Sharma, B. N. Krishnamurti
[1960] *History of the Dvaita School of Vedānta and Its Literature Volume I: From the Earliest Beginnings to the Age of Jayatīrtha (C. 1400 A.D.).* Bombay: Booksellers' Publishing Company.
[1961] *History of the Dvaita School of Vedānta and Its Literature Volume II: From the 15th Century to our own time.* Bombay: Booksellers' Publishing Company.
[1981] Revised Edition of Sarma [1960][1961]. Delhi: Motilal Banarsidass.

Shida, Taisei（志田　泰盛）
[2015] "On the Date of Śivāditya: From the Viewpoint of the Theistic Defenition of *pratyakṣa*." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 印度学仏教学研究, 63 (3): 122–128.

Solomon, Esther A.
[1976] *Indian Dialectics: Methods of Philosophical Discussion Volume I.* Sheth Bholabhai Jeshingbhai Institute of Learning and Research, Research Series, 70. Ahmedabad: B. J. Institute of Learning and Research, Gujarat Vidya Sabha.
[1978] *Indian Dialectics: Methods of Philosophical Discussion Volume II.* Sheth Bholabhai Jeshingbhai Institute of Learning and Research, Research Series, 74. Ahmedabad: B. J. Institute of Learning and Research, Gujarat Vidya Sabha.

Sudo, Ryushin（須藤　龍真）
[2020] 「『ニヤーヤマンジャリー』における「論題と同じ理由」の「他の実例」—itaratad-viparītavinirmuktatva を巡って—」『南アジア古典学』15: 229–256.
[2021a] "Restriction of *Nigrahasthāna* in the Argumentation Theory of *Nyāya*." *Journal of Indian and Buddhist Studies* 印度学仏教学研究 , 69 (3): 23–28.
[2021b] 「マドヴァ著『議論の定義』和訳」『哲学・思想論集』46: 69–96.

Sudo, Ryushin & Kataoka, Kei（須藤　龍真、片岡　啓）
[2021] 「*Nyāyakalikā* 和訳（後半）」『南アジア古典学』16: 195–246.

Varakhedi, Shrinivasa
[2011] *The Path of Proofs: Pramāṇapaddhati of Śrī Jayatīrtha.* Manipal: Manipal University Press. (Reprint 2017).

（日本学術振興会特別研究員 PD）

Conditions of Defeat (*nigrahasthāna*) in Argumentation Theory of Madhva's School
Acceptance and Criticism of Naiyāyikas' Dialectical Framework in *Pramāṇapaddhati*

Ryushin SUDO

This study examines the argumentation theory of Madhva's school of Dvaita Vedānta (dualism). Madhva wrote *Kathālakṣaṇa*, a collection of concise definitions of argumentation. Several annotations have been made on this treatise, indicating the heightened interest in argumentation. In particular, Jayatīrtha, who wrote many commentaries on Madhva's works, systematized Madhva's argumentation theory in his own independent work, *Pramāṇapaddhati*. Concurrently, it includes a detailed critique of Naiyāyikas' argumentation theory. This study aims to summarize the basic dialectical framework of Madhva's school and elucidate the relationship between the Nyāya and Madhva's schools. First, the study provides an overview of Madhva's argumentation theory, especially on conditions of defeat (*nigrahasthāna*), as highlighted in works such as *Pramāṇalakṣaṇa* and *Anuvyākhyāna*. His dialectical system is seemingly based on Naiyāyikas' theory, although he refrains from directly referring to it. Jayatīrtha later criticized Naiyāyikas' argumentation theory in his *Pramāṇapaddhati* and other commentaries on Madhva's works. By analyzing the works of Madhva and Jayatīrtha, this study traces their criticism of Naiyāyikas such as Udayana and Varadarāja, and demonstrates the similarities and differences in the dialectical framework of the Nyāya and Madhva's schools.